

お釈迦様がお亡くなりになった

前田専学さんは著作の中で「ゴータマ・ブッダの心境と親鸞の心境とは、非常に近いものがあるように思われます」と指摘されました。「アーナンダよ。わたしはもう古い朽ち、齢をかさね 老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達した。わたしは 80 歳となった。」「古ぼけた車のようなものだ、古い革紐の助けによってやっと動いているようなものだ。

「自灯明、法灯明とせよ」「この世は美しい。人間の命は甘美なものだ」と言って感懐を述べられました。そして「今から三か月過ぎて後に、修行完成者は亡くなるであろう」と仏陀は入滅の決意を固め予告をしたのでした。

慣れ親しんだヴェーサリー市を後ろ髪引かれる思いで去り、生まれ故郷に向かってアーナンダを連れてトボトボと歩みを進め、いくつかの村を過ぎ、パーヴァー村の鍛冶工チュンダのマンゴーの林に留まりました。翌日チュンダの家で、キノコ料理 (或は、野豚の生肉) を食べたとき激しい病痛と腹から赤い血がほとばしり出て (下痢か) 死ぬのではないかと思われる激しい苦痛に、耐え忍び、「さあ、アーナンダよ、われらはクシナーラーに行こう」と出立されました。病の中、最後の力を振り絞って、苦しい旅だったのでしょう。途中、一本の樹の根元に近づき「わたしは疲れた。私は座りたい。—アーナンダよ、水をもってきてくれ、喉が渇いている、一水を飲みたいのだ」と言われました。しかし、近くの川は多くの車が通り、水が濁って飲めませんので、アーナンダは「その近くにあるカクッタ河は水も澄み清らかでそこまで行き、世尊は水を飲みお体を冷やしてください。」と懇願しましたが、そこまで行く気力がなかったのでしょう。釈尊は再度「水を持ってきてくれ」と言い、アーナンダは困って濁った川まで行って近づいたところ、驚いたことに、濁っていた川の水は澄んで濁っていませんでした。

釈尊はアーナンダに「今夜最後の更こゝろにクシナーラーのウパヴァッタナにあるマツラ族のサーラ樹の林の中で、二本並んだサーラ樹 (沙羅双樹) の間で修行完成者の完全な死が起こるのであろう。さあ、アーナンダよ。われわれはカクッター河へ行こう」と言われ、多くの僧たちと共にカクッター河に行き、沐浴し、水を飲んで、河を渡りマンゴー樹の林に着きました。

疲れていましたので右脇を下につけて右足に左足を重ねて、獅子のように臥されたのでした。衰弱し死を前にしながらも仏陀は、鍛冶工チュンダが最後の供養をしたことに対する後悔の念を取り除くよう心を砕き、チュンダの供養した食べ物には大きな功德があることを告げるようにと、アーナンダに指示されたのでした。なんと優しい思いやりの仏陀ではないのでしょうか。ウパヴァッタナでは釈尊指示の通り、二本のサーラ樹の間に、頭を北に向けて床を敷き、そこに世尊は右脇を下に、足の上に足を重ね、獅子座を設えて、正念し、正しく心をとどめられていました。インドでは最上の横臥法と考えられている「頭北面西」の形です。これが日本の「北枕」の由来です。

沙羅双樹は時期でもないのに花が満開になり、天の楽器が奏でられ天の合唱が虚空に起こったと伝承されています。しかし、釈尊は修行完成者に対する真の供養は、花が降りかかり天の音楽が奏されることでなく、修行僧たちが法に従って実践することこそが最上の供養であると、アーナンダを通して諭されたのでした。

アーナンダは仏陀の没後、遺体の処理、仏塔崇拜、聖地巡礼など、どうしたらよいかと釈尊に聞きました。釈尊は「アーナンダよ、話しかけるな、謹んでおれ。」と言って、最後の直弟子スバダに教えを説き、臨終を迎えられました。「さあ、修行者達よ、《もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成しなさい》」と最後の言葉を残され、第 1 禪から第 4 禪まで循環して瞑想に入られた後、安らかに息を引き取られました。

マツラ族の人々は「明日、われらは尊師の遺体を火葬することにしよう」と言って、舞踊、歌謡、音楽、花輪、香料をもって尊師の遺体を敬い、重んじ、尊び、供養して街の外に運び火葬に付そうと思いました。そこで、街の北の門から都市の中央に運び、東方にあるマクダパンダナ (天冠寺) というマツラ族の祠堂に運んで火葬に付すことになりました。マツラ族の人々はアーナンダに「遺体をどのように処理したらよいのですか」と聞きました。「世界を支配する帝王の遺体を処理すると同じ仕方で修行完成者の遺体布を処理しなければなりません。四辻に修行完成者のストゥーパを作り、花輪または香料をささげ、礼拝し、あるいは心を清めれば、長い間利益を得、また幸福となるでしょう」とアーナンダは言って、さらに「遺体を新しい布で包み、綿でくるみ新しい布で包んでから、鉄の油層の中に入れ、他の鉄槽で蔽い、あらゆる香料を含む薪の推積を作って火葬に付す、このようにします」といいました。火葬が終わったとき、遺骨だけが残りました。マツラ族は尊師の遺骨を 7 日の間公会堂のうちに置き、槍や、弓の柵をめぐらし、舞踊、歌謡、音楽、花輪、香料をもって敬い、供養しました。

火葬が終わってから、釈迦族やマツラ族など関係部族から仏舍利を分配してほしいという要望が次々に出され、結局 8 つの部族に分け、遺灰や歯も分配されました。

参考文献『ブッダ最後の旅』中村元訳 岩波文庫 『ブッダを語る』前田専学著 NHK ブックス